

推論・コミュニケーションの文化差とコンテクスト

大阪市立大学大学院文学研究科 教授

山 祐嗣 (やま ひろし)

Profile 山 祐嗣

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程学修認定退学。博士（教育学）。神戸女学院大学人間科学部教授などを経て現職。専門は認知心理学。著訳書は『日本人は論理的に考えることが本当に苦手なのか』（新曜社）、『思考と推論：理性・判断・意思決定の心理学』（共監訳、北大路書房）、『メンタリティの構造改革：健全な競争社会に向けて』（北大路書房）、『思考・進化・文化：日本人の思考力』（ナカニシヤ出版）、『合理性と推理』（訳、ナカニシヤ出版）など。



心理学の比較文化研究者があまり注目していない概念に、ホール（Hall, 1976）が提唱した、西洋の低コンテクスト文化・東洋の高コンテクスト文化という区分がある。コンテクストとは、コミュニケーション時に暗黙裡に人々の間で共有される背景知識で、高コンテクスト文化では、低コンテクスト文化と比較してそれがより利用される。この場合のコンテクストとは、常識のように、コミュニケーションのときに話し手と聞き手が暗黙的に共有する信念である。たとえば、「今、何時ですか」という質問には、どの国の時間なのかが省略されているが、日本国内での質問ならば、「日本時間についてである」というコンテクストが共有されているので、聞かれた側も日本時間を答えるのである。コンテクストが共有されていれば、「今、日本時間で何時ですか」と質問されると、何か特別なことを聞かれているのかと、逆に面食らってしまうかもしれない。

しかし、コンテクストが共有されていないとコミュニケーションは失敗する。たとえば図1に示されるように、「指輪は婚約の印である」というコンテクストが共有されていない状態で、結婚したい女性に男性が指輪を贈ろうとしても女性は戸惑ってしまう。

コンテクストの高低を取り上げる理由は三つある。第一は、この概念が、弁証法的といわれる東洋人の推論の傾向を説明できることである。第二は、生態的・地勢的要因によってこの文化差を説明することが可能であり、ビッグヒ

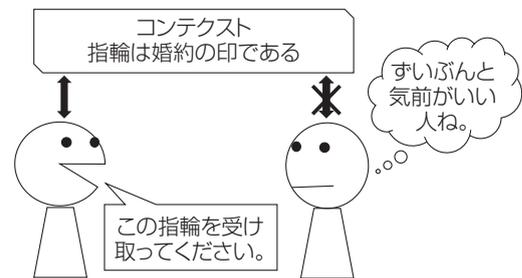


図1 コンテクストを共有しないことによるコミュニケーションの失敗例

ストリーの中の位置づけ可能性を秘めているからである。第三は、グローバル化の時代において必要な異文化共生へのヒントを提供してくれる可能性があることである。

東洋人の弁証法的傾向の説明

東洋人の思考が弁証法的であるとするパイオニア的研究にペンとニスベット（Peng & Nisbett, 1999）のものがある。米国人と中国人を比較した最もよく知られている例は、たとえば、「過度の卑下は半分自慢」というような矛盾が含まれた諺の評価を行なわせたものである。その結果、中国人大学生は米国人大学生に比べて、矛盾が含まれた諺でも理解を示し、またそのような諺を好むことが示されたのである。この結果は、中国人は米国人に比べて、矛盾が気にならず、かつこれを受容しやすいということを示している。この結果は、東洋人が規則に依拠する程度が小さいという傾向として、東洋人の素朴弁証法（naïve dialectics）として

まとめられている。彼らによれば、東洋人の弁証法は、非論理的で劣った推論スタイルでも、ヘーゲルが想定するような高度な弁証法でもなく、以下の三つの原則が含まれている。

①**矛盾の原則** (the principle of contradiction) : 物事が互いに結びつき、世界は常に変化するので、パラドクスや矛盾は絶えず生じている。対立する命題があっても、対立は単なる見かけ上のことで、両方とも真であるかもしれない。あるいは、真実は常にどこか両極の中間にあるかもしれない。

②**変化の原則** (the principle of change) : 世界は流動的であり、絶えず変化している。したがって、それを表現する諸概念も流動的である。

③**全体論の原則** (the principle of holism) : 個々に存在するものは何もなく、全ては互いに結びついている。

東洋人のこの特徴は、どのように説明されるだろうか。当初受け入れられたのは、ニスベットら (Nisbett et al., 2001) による、東洋人の集団主義文化という枠組みでの説明である。集団主義文化では、西洋がそうであるといわれる個人主義文化と比較して集団の調和が重視される。彼らによれば、集団主義文化の東洋人は、矛盾や対立があっても、調和を保つために白黒をつけるよりは弁証法的解決が適応的であるとされる。

一方、スペンサー・ロジャースら (Spencer-Rodgers et al., 2010) は、個人主義・集団主義という区別よりも西洋と東洋に特異的な文化的伝統を重視している。この理由は、中南米の人々は、集団主義文化とされるにもかかわらず、弁証法的思考スタイルをとらないという実験・調査結果が得られているからである。彼らは、東洋人の弁証法的思考という特徴が、文化的伝統によって形成された世界観によるものと推定した。そして、矛盾を許容しない西洋人の思考傾向の文化的背景として、古代ギリシャに源流を發するアリストテレス論理学の伝統を重

視し、一方、東洋人の弁証法的思考傾向の文化的背景として、道教、儒教、仏教の伝統を指摘している。東洋人のこの文化的伝統に基づく世界観は、世界あるいは世の中は、常に変化していて、したがって、いたるところに矛盾が生じているというものである。この三者の中で最も古い道教の中心概念の道 (タオ) は、宇宙と人生の根源的な不滅の真理を表わしている。そして、万物の根源に太極 (タイチー) が想定され、ここから陰陽の二元が生ずるとされている。陰と陽とは互に対立する属性を持った二つの気であり、万物の生成消滅といった変化はこの二気によって起こるとされる。「世界は流動的で常に変化している、そしてそれぞれの事象・事物が互いに結びついている、したがって矛盾は至るところで起きている」という素朴弁証法的な世界観は、このような文化的伝統で形成されたとされる。

文化的伝統による説明を棄却するわけではないが、私 (山, 2015; Yama, in press) は、ホール (Hall, 1976) の西洋の低コンテクスト文化・東洋の高コンテクスト文化という区分による説明を試みている。つまり、高コンテクスト文化では、なんらかの矛盾があっても、コンテクストで解決できるので気にしないという態度・習慣が生まれやすいと解釈できるのである。たとえば、「過度の卑下は半分自慢」という矛盾が含まれた諺でも、「過度に卑下することによって、聞き手に否定してもらうことを期待しているのではないか」というコンテクストを利用することが可能ならば、「実は自慢なのだ」という解釈が可能になる。

文化差の生態的・地勢的説明へ

ホールの西洋の低コンテクスト文化・東洋の高コンテクスト文化という区分は、心理学的実証研究による直接的な証拠がまだまだ少ないことが弱みだが、文化多様性への生態学的・地勢的アプローチに結びつく可能性を秘めている (山, 2015)。このアプローチは、文化の多様性や文明の発展の不均衡を、特定の民族の優秀さや遺伝的特徴の差異などの概念を借りずに説明

が可能な点で貴重であり、昨今注目されつつある、さまざまな科学的知見を取り入れて人類史を現在までたどるビッグヒストリーの中に位置づけることも可能である。

コミュニケーションの起源についてはここでは詳しく議論できないが、初期のものはジェスチャーが主体で、その解釈はコンテキストに著しく依存したものと推定されている。また、伝統的な氏族・部族社会は高コンテキスト文化だっただろう。そのような文化環境からどのようにして低コンテキスト文化が生まれたのかという疑問に対する答えは、一言でいえば、文化背景を異にする人たちが出会ったからであると推定できる。低コンテキスト文化は、コンテキストを共有しない人々が集まった状況で形成されるので、図2に示されるように、歴史的には、自給自足よりも異文化間交易が盛んな状況で低コンテキスト文化が生まれやすい。そうすると、生態学的要因として、食糧などの資源の分布が均質ではないという条件をあげることができる。しかし、交易・交流をしながら、そのまま複数の文化が同質の文化集団に統一されてしまうと、そこには再び高コンテキスト文化が形成されることになる。したがって、統一されないような地勢的要因、すなわち広大な平野が存在しないということが条件になる。

歴史的にこれらの条件を満たしているのは、

古代ギリシャであろう。主な農業は牧畜であり大麦や小麦も栽培されていたが、紀元前4世紀ごろのアテネの食糧自給率は、約40パーセントと推定されている（現代の日本とほぼ同じ水準である）。しかも、古代ギリシャは、点在するわずかな平地に都市国家を作り上げていて、交易は盛んなのだが地勢的に単一文化的統合が行われにくいという条件が整っていた。古代ギリシャの人々が低コンテキスト文化を築き上げていたかどうかは、わからない。しかし、この文化の中で作られたのがアリストテレスの論理学である。この道具は、対話や議論の中で、どのようなコンテキストにおいても真偽について矛盾を生じさせないことを、すなわち低コンテキスト状況で通用することを志向していた。

なお、これと対照的な地域が、弁証法の文化的伝統を生み出した中国である。古代中国でも、さまざまな異文化集団が交易を行っていただろうが、広大な平原を中心に比較的単一的な文化に統合されていった。異民族の侵入を受けたりもしたが、唐や明に至る歴史は、漢民族を中心とする漢化の過程、すなわち文化的統一の過程であるとみなすことができるのである。

このような理由から、低コンテキスト・高コンテキストという区分は、文化的伝統でさまざまな文化差を説明するアプローチに対して、そのような文化的伝統がどのような生態的・地勢

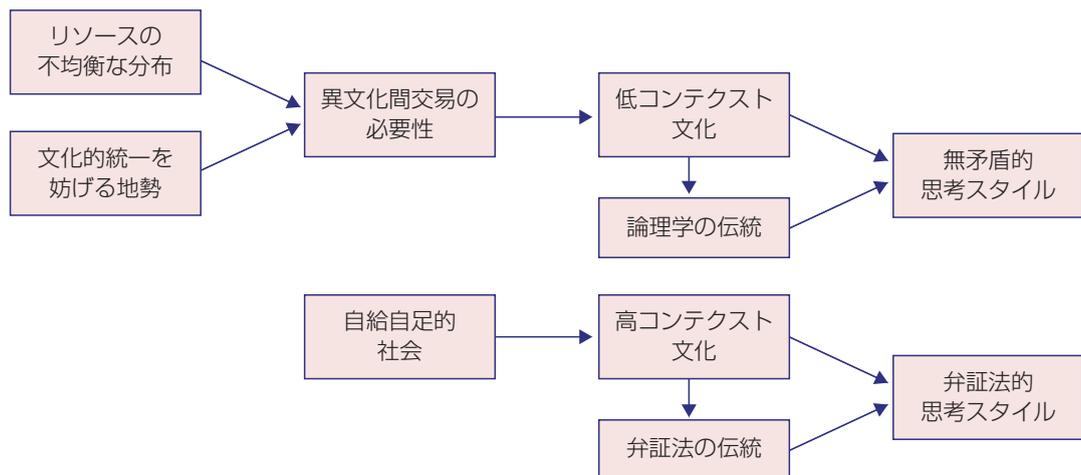


図2 生態的・地勢的要因、文化的要因、個人の精神的傾向の三者関係をおおまかに表現したもの（山，2015 所収の図を改変）

的要因によって形成されたのかという示唆を与えることができるのである。

異文化共生への提言

低コンテクスト文化・高コンテクスト文化という区分は、グローバル化の時代に必要な異文化共生へのヒントを提供してくれる。異文化交流状況では、典型的に低コンテクスト文化社会が構成されるが、異文化共生のためのモデルとして、低コンテクスト文化におけるコミュニケーションスタイルおよびそれを支える規範は非常に重要であろう。低コンテクスト文化では、自身の文化内でのみ共有されている常識あるいはコンテクストを使用することができず、暗黙のうちに共有できていない情報はすべて明示しなければならない。

このように考えると、高コンテクスト文化とされる日本人を含めたアジア人は、グローバル化によって生ずる低コンテクスト文化に対して、低コンテクスト文化の西洋人と比較して適応において不利が生じてくる可能性がある。たとえば、キムら (Kim et al., 2008) は、アジア人やアジア系アメリカ人は、ヨーロッパ系アメリカ人と比較して、困ったときに直接的あるいは明示的に援助を求めることを躊躇し、かつ依頼するのにストレスを感じやすいということを報告している。高コンテクスト文化であるアジア系の人々は、コンテクストを利用した間接的かつ暗黙的な依頼が習慣となっているので、直接の援助依頼ではストレスを感じやすいと解釈可能である。

このグローバル化の中で、概して西洋の文化基準が世界の標準とされやすい。そうすると、アジア人は、単に低コンテクスト文化的コミュニケーションに慣れていないというだけではなく、西洋でのみ通用していたような基準に適応しなければならないという二重の困難を経験することになる。高コンテクスト文化よりも低コンテクスト文化が優れているわけではないが、グローバル化された世界では低コンテクスト文化が構成されやすい。そのような中では、日本人を含めたアジア人は、単に低コンテクスト的

価値観を理解するだけではなく、たとえば西洋文化でのみ通用してきた基準を世界基準とするような、行き過ぎた西洋中心主義を是正するための主張も必要であろう。

文 献

- Hall, E. T. (1976) *Beyond culture*. Garden City, NJ: Anchor Books/Doubleday. [E・T・ホール／岩田慶治・谷泰 (訳) (1993) 『文化を超えて』TBSブリタニカ]
- Kim, H. S., Sherman, D. K. & Taylor, S. E. (2008) Culture and social support. *American Psychologist*, 63, 518-526.
- Nisbett, R. E., Peng, K., Choi, I. & Norenzayan, A. (2001) Culture and systems of thought: Holistic versus analytic cognition. *Psychological Review*, 108, 291-310.
- Peng, K. & Nisbett, R. E. (1999) Culture, dialectics, and reasoning about contradiction. *American Psychologist*, 54, 741-754.
- Spencer-Rodgers, J., Williams, M. & Peng, K. (2010) Cultural differences in expectations of change and tolerance for contradiction: A decade of empirical research. *Personality and Social Psychology Review*, 14, 296-312.
- Yama, H. (in press) Thinking and reasoning across cultures. In L. J. Ball & V. A. Thompson (eds.) *International handbook of thinking and reasoning*. Hove, UK: Psychology Press.
- 山祐嗣 (2015) 『日本人は論理的に考えることが本当に苦手なのか』新曜社